

一 与大比丘衆の事

仰せに云はく、文句の一に云はく「釈論に明かす大とは亦多^{また}と言ひ、亦勝^{あまね}と言ふ。遍く内外の經書を知る故に多と言ひ、又数一万二千に至る故に多と言ふ。今明かさく、大道有るが故に、大用^{ゆう}有るが故に、大知有るが故に、故に大と言ふ。勝とは道勝^{どうすぐ}れ、用勝^{ゆう}れ、知勝る故に勝と言ふ。多とは道多く、用多く、知多し。故に多と言ふ」と。又云はく「含容^{がんよういっしん}一心一切心なり。故に多と名づくるなり」と。記の一に云はく「一心一切心と言ふは、心境俱に心にして各一切を摂す、一切三千を出でざる故なり。具^{つぶさ}に止觀の第五の文の如し。若し円心に非ざれば三千を摂せざる故に、三千の総別^{ことごとく}咸^{くう}く空^け仮^{ちゆう}中なり。一文既に爾^{しか}なり。他は皆此に准^{じゆん}ぜよ」と。此の本末の意は心境義の一念三千を釈するなり。止觀の第五の文とは「夫^{それ}一心に十法界を具す乃至不可思議境」の文を指すなり。心境義の一念三千とは、此の与^よ大^{だい}比^び丘^く衆^{しゆ}の大^{だい}の字^じより釈し出だせり。大多勝の三字三諦三觀なり。円頓^{えんどん}の行者起念の当体三諦三觀にして大多勝なり。此の釈に総と云ふは一心の事なり、別とは三千なり、一文とは大の一字なり。今末法に入りては法華經の行者日蓮等の類、正^{まさ}しく大多勝の修行なり。法華經の行者は釈迦如来を始め奉り悉^{ことごとく}く大人と為して敬ひ奉るなり。誠に以て大曼荼羅^{どうく}の同共^びの比丘衆^くなり。本門事の一念三千南無妙法蓮華經の大多勝の比丘衆なり。文々句々六万九千三百八十四字の字ごとに大多勝なり。人法一体にして即身成仏なり。されば釈に云はく「大は是^{これ}空の義、多は是^{これ}仮の義、勝は是^{これ}中の義」と。一人の上にも大多勝の三義分明に具足す。大とは迹^{しやく}門、多とは本門、勝とは題目なり。法華經の本尊は大多勝の大曼荼羅なり。此豈^{あに}与大比丘衆に非ずや。二界八番の雜衆悉く法華の会座^{えざ}の大曼荼羅なり。法華經の行者は二法の情を捨て、唯妙法と信ずるを大と云ふなり。此の題目の一心一切心を含容するを多と云ふなり。諸經諸人に勝れたるが故に勝と云ふなり。一切心に法界を尽くす。一心とは法華經の信心なり。信心即一念三千なり云云。